

最後にひとつだけ
お願いしても
よろしいでしょうか⑤

鳳ナナ
Nana Otori

ジュリアス

パリスタン王国の第二王子。
優秀だがスカレットをからかって
遊ぶのが大好きな腹黒い性格。

スカレット

冷たくも美しい容姿から
「氷の薔薇」と称される
ヴァンデミオン公爵家の令嬢。
第二王子との婚約破棄をきっかけに
悪徳貴族達を拳で成敗した。

アルフレ임

竜の住まう国・ヴァンキンシュ帝国の皇子。
スカレットのことを「業火の花嫁」と
呼び、求婚している。

ダンテ

強大な魔力を持つ
ローフの男。スカレットに
魔眼を授けたが――？

ヴァルガヌス

ヴァンキンシュ帝国の
後継者候補の一人。
アルフレ임とは
敵対関係にある。

ルク

ヴァンキンシュ帝国
皇帝の従僕。
とある稀有な力を
持つており――？

登場人物紹介

目次

最後にひとつだけお願いしてもよろしいでしょうか 5

7

書き下ろし番外編

素敵なお茶会を始めましょう

337

最後にひとつだけお願いしてもよろしいでしょうか
5

第一章 朝食には丁度良い量でした

業火宮^{ごうかきやう}の二階のバルコニーでジュリアス様とお話しをした後。

屋内に戻った私——スカレットは、寝室に戻るために人気がない廊下を歩いていた。

すると廊下の壁際の床に、長い赤髪をおさげにした子供が横たわっているのを見つめます。

「……レックス？」

そこにいたのは体を丸めて眠っているレックスでした。

「こんなところで寝ていたら、風邪を引いてしまいますよ？」

近くでしゃがみこみ話しかけてみますが、起きる気配はありません。こんな時間に人気がなくなつた廊下で、どうして一人で寝ていたのでしょうか。

もしかして私を待っていてくれたのでしょうか。

「……ごめんなさいね。すぐにバリストンに連れて帰るつもりだったのに」

元々私がここヴァンキツシュ帝国にやってきた目的——それは、レックスが発症してしまつた低地病^{ていちびやう}を治療するためでした。

竜人族のヘカーテ様いわく、低地病^{ていちびやう}とは飛竜が大地に留まらないように、古^{いにしえ}から種族すべてにかけられた呪いのようなもので、治す方法はたった一つ。心臓の誓い^{ひじあつ}という、誓約を結んだ竜と人間の命を共有化する竜人族に伝わる秘術^{ひじゆつ}のみとのことでした。しかしこの秘術^{ひじゆつ}には大きな代償があり、それは——

「——どちらかが死ねば、魂で繋がっている片側も即座に死に至る、でしたか」

長く生きたところで精々が八十年の寿命しか持たない人間である私が死んだ時、千年以上もの時を生きる竜人族のレックスも同時に死んでしまう。

そんな片側だけの命を大幅に擦り減らす残酷な方法は、たとえレックスが承諾したとしても絶対に領けません。

「大丈夫。きっと他にも治療する方法はあるはずです」

小さなレックスの身体を背負って立ち上がります。

たとえこの国に治療法がないとしても、私はいつか絶対にこの子を家に連れ帰ります。「レックス、貴方は私の……いえ、ヴァンディミオン家の大切な家族なのですから」

そんなことを考えながら廊下をしばらく歩いてみると、途中で侍女の方に出会いました。彼女から来客用の寝室の場所を聞いた私は、レックスをその部屋に連れていき、ベッドに寝かせます。

「おやすみなさいませ」

幸せそうに寝息を立てるレックスの頬を撫でてから私は寝室を後にしました。

自分の寝室までは少し遠回りになってしまいましたが、歩きながら考え事もしたかったので丁度良かったですわね。

なにしろヴァンキッシュに来てから今に至るまでの数日間、あまりにも濃密で自分の考えをまとめる暇もありませんでしたから。そうやって今までのことを頭の中で整理していますと――

「あら、あそこにいらつしやるのは――」

廊下の曲がり角を曲がったところで、通路の一番奥にレオお兄様とシグルド様が見えました。

お二方共、真剣な表情をしている様子から見るに、明日以降に起こりうる出来事への対処や今後の方針を話し合っているのでしょう。

「ヴァンキッシュに来てからも、レオお兄様とシグルド様は気苦労が絶えなそうです

わね」

私よりも先に、ジュリアス様と共にヴァンキッシュに入国していたレオお兄様やシグルド様の目的は、皇位を争うアル弗雷ム様を援護するためでした。

パリスタンという後ろ盾があるからか、特に策もないにもかかわらず自分が皇位を継ぐのが当然だと信じて疑わないアル弗雷ム様。

そんな彼とは対照的に、皇位を狙う気満々の明らかに曲者ぞろいの後継者候補――アル弗雷ム様の弟フランメ様、軍師將軍ヴァルガヌス様、近衛兵団長イフリーテ様。

彼らを出し抜いてアル弗雷ム様が皇位に就くなど容易なことではなく、顔合わせをした時の険悪な様子からただ事では済まないだろうと予測していた私達でしたが、その懸念は見事に的中。

「バーン陛下……まさか私と手合わせした翌日に、あんなことになるなんて」

私達と会談した翌日に起こった、皇帝バーン陛下の不審な病死。

明らかに捏造されたバーン陛下の遺書による、フランメ様の皇帝即位。

さらにヴァルガヌス様の協力者である、ファルコニアの蒼天翼獣騎兵団の襲撃と。私達は立て続けに後継者争いを巡る諍いに巻き込まれることとなりました。

「まさか武力こそが至高と思われていたヴァンキッシュで、このような謀略に巻き込ま

れるなんて思いもしませんでしたわ。まあそのおかげで、襲ってくるお肉をブン殴る機会には事欠かなかったわけですが」

その後、バーン陛下の死やフランメ様の即位は、ヴァルガヌス様とイフリーテ様二人の策略だったことが判明します。

それによりお二方は、アルフレ임様側に立つ私達にとつて倒すべき敵であり、私にブン殴られるお肉として認定されることとなったのでした。

そんな中で、ジュリアス様の片腕として扱き使われていたレオお兄様とシグルド様は、心休まる暇などほとんどなかったことでしょう。

「話し合いが大事なものは分かりますが、今夜くらいはゆっくりと休んでいただきたいものですわね」

やってきた曲がり角を戻った私は、お二方には顔を合わせずに遠回りで自分の寝室に向かうことにしました。ここで私が姿を見せたら心配性のお二方はきっと、こんな夜に歩いているなんて何かしでかすのでは？ と、気になってしまいうでしょうから。

「……またバルコニーに戻ってきてしまいましたか」

夜空が広がる二階のバルコニーには、すでにジュリアス様のお姿はありませんでした。少し面倒ですが、先程とは逆側のバルコニーの出口から寢室を目指しましょう。

そう思いながらバルコニーを歩いていると、ふと。

通りがかりに地上の庭の様子が目に入りました。そこにはアルフレ임様が率いる紅^{こう}天竜騎兵团^{てんりゅうきへいたん}の中でも特に信頼が置かれている四人の方々——ジン様、ノア様、ランディ様、ジェイク様の通称紅の四騎士が、何やら立ち話をされています。

「先のイフリーテ様との戦いの時は、あの方々が味方で本当に助かりましたね」

まだヴァルガヌス様とイフリーテ様がバーン陛下の死の首謀者だと判明する少し前。

ナナカの内偵により、お二方が仲違いをしたという情報を入手した私達は、近衛兵団の詰所にこもっているイフリーテ様に事情を聴くため、殴り込みをかけました。

敵方に対して圧倒的に戦力が心もとない私達でしたが、アルフレ임様と共にいついてきてくれた四騎士の方々はその名に恥じぬ武勇で、戦線を支えてくださいました。

「結局おしゃべりクソ野郎、ヴァルガヌス様の増援が現れて退却することになりましたが」

その後、私達が戦って疲弊したタイミングで現れたヴァルガヌス様は、イフリーテ様ごと私達を消そうと兵を仕向けてきます。

全員が魔力も加護もほとんど消費し、アルフレ임様が重傷を負う中、なんとかここ業火宮^{ごうかきゅう}に帰ってこれたのは間違いなく、彼らの功績あったのことでしょ。

「感謝いたします、四騎士の皆様。どうかこの戦いが終わるまで、ご無事であられますように」

こちらに気づいていない彼らに会釈をしてから、バルコニーを後にします。

屋内に戻った私は遠回りで廊下を行き、ようやく業火宮の建物の入口がある中央の広間に戻ってきました。入口のドアの前には王族の衣服を纏った赤髪の殿方が立っていて、彼は私に気づくと笑みを浮かべて会釈をします。

「こんばんは、スカーレット様。このようなお時間にお一人で、どうなされましたか？」

「ごきげんよう、フランメ様。少し考え事がしたくて夜風を浴びていましたの」

アルフレ임様と同じヴァンキッシュ王家の血を引きながらも、荒々しい雰囲気を感じさせず柔和な表情を浮かべているこの方こそ、謀略の末に皇帝に担ぎ上げられてしまった第二皇子、フランメ・レア・ヴァンキッシュ様その人でした。

「そうでしたか。ヴァンキッシュの夜は冷えますから、外に出られる時はどうか暖かいお召物を羽織られますように」

「お気遣い感謝いたしますわ」

私達がイフリーテ様から事情を聴きに、近衛兵団の詰所に乗り込もうとしていた頃。

フランメ様はヴァルガヌス様の手によって皇宮に囚われておりました。

その後、詰所に乗り込んだ私達を殺すため、ヴァルガヌス様は皇宮を離れます。その隙にジュリアス様はレオ兄様と守りが手薄になった皇宮に乗り込み、なんとかフランメ様を救い出すことに成功したのでした。

「フランメ様の方こそ、お体の調子は大丈夫でしょうか。監禁されていた時に何か危害を加えられるようなことはありませんでしたか？」

「お気遣い痛み入ります。私には傷一つありませんよ。彼らは私を懐柔して都合の良い傀儡とするために、とても丁寧に扱ってましたから。ですが、たとえ厚遇を受けたからといって、彼らが犯した罪を許すつもりは一切ありません」

つい数時間前、救い出されて業火宮までやってきたフランメ様は、皆様の前で宣言されました。

現皇帝として、ヴァルガヌスの野望を阻止することに尽力すると。

これによりヴァルガヌス様は、完全に皇宮で孤立し、最早追い詰められたネズミ……いえ、追い詰められた悪党も同然となりました。

つまり、私がムカつくヴァルガヌス様をブン殴るための障害は、最早なきに等しいという事です。ああ、皇宮に突入する時が待ちきれませんわ……！

「ええ。世のため人のため、共に悪逆の徒であるヴァルガヌス様を成敗しにまいりま

しょう」

「はい！　どうかその際にはお力添えの方を、よろしくお願いいたします！」

私の答えに力強く頷いたフランメ様は、まだ皇帝としてやることが残っているようで「おやすみなさいませ。良い夜を」と告げて、そのままドアから外へと出ていかれました。

さあ、私も早々に寝室に戻りましょう。疲れを残していたら、いざクズを殴って気持ちよくなろうという時に思い切り殴れませんかからね。

「……やっと帰ってきたか」

丁度私の寝室が見える廊下を歩いている時でした。

部屋の前立っていた黒髪の少年——ナナカが、私の方に歩いてきます。

「遅かったな。どこに行ってたんだ？」

「夜の散歩ですわ」

私の答えにスン、と鼻を鳴らし眉をひそめるナナカ。

勘の良いこの子のことでですから私の嘘を見抜いてしまったのでしょうか。

「心臓の誓い」のことは、できればまだ誰にも知られたくないのですが。

「……別になんでもいいんだけどさ。調子悪そうだったし、早めに休んだ方がいいん

じゃないか？」

ナナカがそっぽを向きながらそう言いました。

この子が心配するのも無理はありません。

それは近衛兵団の詰所に乗り込んだ時のことでした。イフリーテ様との戦いの最中、私はとある理由により突然加護が使えなくなり、気を失う寸前まで消耗してしまったのです。

今は回復したとはいえ、その時の私の有様を見ていたナナカとしては、こうして大して休まずに歩き回っている姿を見るのは気が気ではないことでしょう。

「そうですね。今日はもう、すぐ床に就きますわ」

そう答えると、ナナカは納得したのか「ん」と頷き、レオお兄様に呼ばれているからと言ってその場を去っていきました。

「心配をかけてごめんなさいね。でも、もうあの時のように不甲斐ない姿は晒しませんわ」

寝室のドアを開けて部屋に入ります。

暗い部屋の窓からは月明かりが差し込み、テーブルの上に置かれた黒い手袋を明るく照らし出していました。

それはただ人を殴るためだけのものではなく、とある方との絆にもなっていた思い出の品です。

「……グラハール先生。まさかお会いできるなんて思ってもいませんでした」

幼い頃、ヴァンディミオン邸に一週間だけ家庭教師に来て、私に様々なことを教えてくれたグラハール先生。この手袋の元々の持ち主でもあるその方と私は、このヴァンキッシュで思いもよらぬ再会をすることとなりました。

「ふふ。本当に先生は、いつも突然現れますわね。それも私が困っている時に限って」
イフリーテ様との戦いの最中、詰所に現れたヴァルガス様の増援により追い詰められた私達が、絶体絶命の危機に陥った時。

先生は突然現れて、専門科目だというその圧倒的な暴力で私達を救ってくださいました。

しかもどのような手段を用いたのか、原因不明で使えなくなっていた私の加護の力まで復活させてくださったのです。さすがはグラハール先生ですわ。

「そんな先生が魔族だなんて、私には信じられません」

皆様の話によればグラハール先生は魔族で、しかも「^{グビヤ}白夜の君」と呼ばれる神にも匹敵する強大な力を持つ悪魔の疑いがあるのだとか。



実際、一週間家庭教師に來ただけの先生について、知っていることなんて私にはほとんどありません。ですが――

「世のため人のためにクズをブン殴るという素晴らしい教えを私にくださった、人生の師とも言えるグラハール先生。そんな方がこの大陸の人々を苦しめている魔族だなんて、あり得ませんわ。それを言うのであれば――」

ヴァンキッシュ帝国に來てから、事あるごとに私の前に現れる黒ずくめのローブの男。私に魔眼まがんなる怪しい力を与えては、意味深なことを示唆しさして去っていくあの方こそ。魔族と呼ぶにふさわしい邪よこしまな存在なのではないのでしょうか。

グラハール先生いわく、私が加護を一時的に使えなくなったのも、魔に魅入られて神に嫌われたせいとのことでしたし。

「また加護を失わないためにも、もう二度とあんな怪しい力に頼らないようにしませんとね」

寝間着に着替えた私はベッドに横になり、目を閉じました。

――竜が住まう国、ヴァンキッシュ帝国。

竜人族の子レックスの病から始まり、皇帝の座を巡る皇位継承戦に、暗躍あんやくする魔族の影。

様々な人との出会いや事件を経て、最後に舞台に残ったのは黒幕のヴァルガス様一人のみ。

後は彼をブン殴ってスカツと終幕フィナーレ――といけば良いのですが。

「たとえ一筋縄ではいかない明日がきょうとも、私が決着をつけますわ――この拳で」

翌日の朝。

二日目となる業火宮ごうかきやうでの目覚めを迎えた私は、侍女じじよの方々が来る前に自分で身支度を始めました。

なにしろいつヴァルガス様の兵が攻め込んでくるかも分からない状況ですからね。自分でできることは自分でやらなくては。

「やはりいつものドレスが一番落ち着きますわね」

鏡に向かい合い、一人で終わらせた身支度に落ち度がないか確認します。

着ているのはパリストンから持ってきたお気に入りの赤いドレス。

魔道具というわけでもなく、職人の方に仕立てていただいた至って普通の服ですが、私の身体に合わせたオーダーメイドのこのドレスは、やはりどんな服よりも着心地が良く感じます。

しかも色が深い赤のため、どれだけ悪党の返り血を浴びても目立たないという、かゆいところに手が届く憎い仕様になっているのも嬉しいところ——

「やはり貴女には赤いドレスが一番似合うな。言ったことがあったか分からんが、私は幼い頃からずっと、その鮮血のように赤い薔薇の色が好きだったんだ」

……爽やかな朝で気分も良かったというのに、つい思い出したくもないことを思い出してしまいました。いつだったか、私のドレスを見てジュリアス様が突然、そんなことを口走ったのです。

その時は何を今更、と怪訝に思っていたのですが——

「……別に、同じ薔薇の赤色が好きだったなんてただの偶然ですから」

そもそも私が赤色のドレスを好んで着るようになったのは、八歳になろうかという時のことでした。

偶然通りかかった王宮の庭園で私は、一輪の赤い薔薇を見つめます。有象無象の花に埋もれることなく咲き誇るその様を見て、私は思わず「綺麗」と声を漏らしてしまいました。

美しく気高く咲く孤高の薔薇——それは私が憧れる貴族の淑女像そのもので、この花と同じ色のドレスを纏えば、私も美しく気高い存在になれるのではないかと、子供心に

そう思ったのです。

後から聞いた話によれば、それはまだ幼かったジュリアス様が気に入って世話をしていた薔薇だったようで、奇しくも私達は同じ薔薇の赤色に惹かれた者同士だったというわけでした。

「たとえ今、赤いドレスを着ているからといって、貴方が好きな色に染まったつもりはありませんので」

パリスタンでは殿方の好きな色のドレスを令嬢が纏うことは「貴方の色に染めて?」という求愛の印だという話が、嗜好きの令嬢達の間で囁かれております。

とんでもないお話ですわ。私にそのような気は毛頭ありませんので。

「……そう、これはただ私が好きで着ているだけですもの」

言い聞かせるように言って目を閉じます。

するとふと、ジュリアス様に抱きしめられた昨晚のことが頭をよぎりました。

『貴女を気にかけるのは国のためだけではない』

そう言ったジュリアス様に対して私は「いつまでもはぐらかしてはつきり想いを伝えてこないのなら、別の方の気持ちに応えてしまいますよ?」だなんて。

まるで恋にかまけた年頃の令嬢のようなことを口走ってしまい——

「……昨晚の私は、どうかしてしまいましたわ」

……完全に八つ当たりですわね。

レックスの「心臓の誓い」のことや、煮え切らないジュリアス様の態度に、気持ちが落ち着かず、つい取り乱してしまいました。

「反省しなければなりませんわね」

パン、と両手で軽く頬を叩きます。

気持ちを切り替えましょう。今日は楽しい楽しい私だけの祝日、そう——撲殺の日ですから。

「さあ、今日は溜まった鬱憤をスカッと晴らさせていただきますわよ」

シュツシュツと拳を素振りします。

アルフレ임様が目覚め次第、ヴァルガヌス様を捕らえるために皇宮に乗り込むとのことでしたので、今日はおそらく敵側にいるたぐさんの兵士のお肉を殴ることになるでしょう。

自国の兵士同士の争いを避けるために、交戦前にフランメ様が皇帝としてヴァルガヌス様の陣営に投降を呼びかけるとのことでしたが、あの方がそれで引き下がるとは到底思えません。

というか、引き下がられては誰も殴れないので困ります。私が。

「私の期待を裏切らないでくださいね、ヴァルガヌス様」

素振りを終えた私は部屋のドアに向かいます。

朝の作戦会議をすと言っていた時間にはまだ少し早いので……そうですわね。昨夜から寝ずの番をしてくれていた紅天竜騎兵団の方々に、感謝と労いの気持ちを伝えるに行くとしましょうか。

と、そんなことを思いながらドアを開けて廊下に出ると、そこには——

「あら」

人化したレックスが、どこか物憂げな表情をしてうつむきながら立っていました。

一瞬、昨晚の「心臓の誓い」のことが頭をよぎります。

ですが私はそれを吞み込んで、素知らぬフリをして微笑みかけました。

「ごきげんよう、レックス。どうしたのですか、こんな朝早くに」

レックスはおそろのおそろといった様子で上目遣いに私を見上げてきます。

何かを私に伝えたいけれど、言い出せない。そんな様子です。

「……あのね、マスター。ボク、ボクね……」

「はい」

レックスの両手を優しく握ります。
強張っていた小さな手が柔らかく解れるまで、私は何も言わずに彼が話し出すのを待ちました。

「ボク……マスターに伝えたいことがあるんだ」

レックスが顔を上げて私の目を見つめてきます。

不安そうな表情を浮かべながらも、その瞳には覚悟を決めた者の決意がハッキリと宿っていました。

「昨日の夜ね、ボク、聞いちゃったんだ。ヘカーテとスカーレットが話していた、心臓の——」

その言葉をレックスが口にしようとした次の瞬間。

突然宮の外から、殿方の大きな声が響き渡ってきました。

「誰か門まで来てくれ！ 外が大変なことになっているぞ！」

その声にレックスがハッ、と表情を引き締めます。

「マスター！ 話は後だよ！」

「はい。門の方に急ぎましょう」

レックスと共に即座に廊下に飛び出します。

外からの声に混乱している侍女^{じじょ}の方々の横を通り過ぎ、広間から宮の外の庭に飛び出すと、そこにはすでにたくさんの方が集まっておりました。

皆様は一樣に困惑した表情をしていて、人垣になっていて私達からは見えない門の方を見ているようです。敵襲……にしては、緊迫した様子ではありませんし、一体何が起こっているのでしょうか。

「スカーレット！」

前方の人垣から抜け出したナナカがこちらに駆け寄ってきます。

ヴァルガヌス様の動きを監視するために皇宮の方に偵察に出ていたナナカが戻っている、ということは、やはりそちらの方で何かあったということでしょうか。

「門の外で一体何が起こっているのですか？」

私の問いにナナカは周囲の方々と同じく、眉をひそめて困った表情で答えました。

「皇宮の周辺で張り込んでいたら帝都の方がやけに騒がしくて、何かと思つて様子を見に行ったんだ。そしたら——」

「——どうか落ち着いてください皆さん！ 我々はそのようなことを望んでいません！」

ナナカの言葉を遮るように、フランメ様の必死な叫び声が聞こえてきました。

「……門の近くにまいます。フランメ様が心配です」

私の言葉にナナカとレックスが頷きます。

人垣の方に歩み寄り「失礼しますわ」と声をかけ、門が見える場所まで移動します。するとそこにはフランメ様の後ろ姿と、開いた門の外いっばいに押し寄せたヴァンキッシュの民の方々の姿がありました。

彼ら、彼女らは各々が皆、鉄棍や斧などで武装しており、その表情は怒りに満ちています。

その様を見て、レックスが焦った表情で叫びます。

「武器なんて持って、みんなどうしちゃったのさ!? ボク達は何したって言うんだよ!」

この状況、もしやヴァルガヌス様が国民をそそのかして我々に仕向けてきた……? だとすればこれはとても厄介なことに――

「――水くせえこと言ってるんじゃないよ! フランメ様よ!」

民衆の中でも一際筋骨隆々だった一人のおじ様が叫びます。

その言葉を皮切りに、周囲の国民の方々も一斉に声をあげました。

「話は聞いたぜ! バーン陛下が亡くなられてからヴァルガヌスのクソ野郎がやりたい放題やってるってな!」

「皇帝になったフランメ様を監禁した上に、アルフレイム様に兵隊をけしかけて亡き者

にしようとしたらしいじゃないの!」

「俺達あ、アルフレイム様もフランメ様もこーんなにちつこいガキの頃から知ってただ! そんな息子同然の皇子達を卑劣な手で害そうだなんて、あのクソ野郎許せねえ!」

「これから殴り込みに行くんだろ? あたし達もついていくよ!」

「帝都の民の中でも特に武芸に秀でた連中を千人ほどかき集めたんだ! 決して足は引つ張らねえから連れていってくれよ!」

民衆が私達と敵対したかと思いましたが、どうやら思い違いだったようです。それどころかこの方々はヴァルガヌス様の悪事をなぜか知っていて、義憤に駆られている様子でした。

それを見たフランメ様は、険しい表情で首を横に振ります。

「いけません! これは皇宮の内部で起こっている身内同士の権力闘争です! 民を巻き込むなんて以ての外だ!」

確かにフランメ様が言っていることは立派な考えかと思えます。

いくら志願してきたとはいえ非戦闘員である国民を外敵との戦争ならともかく、身内同士の争いの戦力として扱うなんて、本来はあってはならないことですから。

「そもそものしてなぜこの話を国民の皆さんが知っているのですか? 一体誰がそんな

ことを――」

「――私だ!」

どこからか聞いたことがある暑苦しい声が響いてきました。

背後を振り返るとそこには声の主、アルフレ임様が腕を組んで仁王立ちしています。今日中には意識が戻るとは思っておりましたが、もう元気に歩き回っているなんて相変わらず無駄に高い生命力をお持ちで。

「今朝目覚めてこれまでの状況を聞いた後、紅天竜騎兵団の部下に頼んで今この国で何が起こっているのかを国民に流布させてもらった!」

そう言って、アルフレ임様はズンズンと門の方に歩いていきました。

そして民衆の前に立つと、両腕を大きく広げて叫びます。

「同胞達よ! よくぞ集ってくれた! 共にこの国を腐らせる邪知暴虐の痴れ者、ヴァルガヌスをひっ捕らえようぞ!」

「うおお! アルフレ임様万歳!」

「業火の貴公子万歳!」

凄まじい歓声があがります。

アルフレ임様……国民の方々にこんなに人気があったんですね。

ヴァンキッシュに來た時、衛兵の方々には散々な言われようだったので、皇帝になるなんて正気ですか? と思ったのですが。大した求心力ですわ。

「なんてことを……兄上!」

フランメ様が怒りの形相でアルフレ임様に詰め寄ります。

「兄上は民を利用し、身内同士の争いの道具にするおつもりですか! それは私達、国の上に立つ者が一番やつてはならない行いのはずです!」

フランメ様の言い分もごもっともです。

私もパリスタン王国で同じようなことが起これば、同じ感想を抱いたでしょう。

ですが――

「――手ぬるい!」

アルフレ임様が目を見開いて一喝します。

「相手は武力が物を言うヴァンキッシュで頭脳だけで軍師將軍にまで上り詰めた男だ! 追い詰められているとはいえ、未だどんな策を練っているか分からぬ! そんな状況で綺麗事を言っていられる場合か!」

握り締めた拳をフランメ様に向けながら、アルフレ임様が叫びます。

「想像してみよ! もし我々が敗れ、ヴァルガヌスが頂点に立った時この国はどんな

る！ 民はどうなる！」

「それは……」

フランメ様が狼狽えた顔で言い淀みます。

アルフレ임様はフランメ様の肩に手を置くと、真剣な表情で言いました。
「フランメ、我が弟よ。なぜ民がここに集い、武器を手にして怒りの表情を浮かべているのか分かるか？ それは彼らが気骨も信念も持たぬ卑劣漢（ひろうまん）のヴァルガヌスに国を支配されている現状に憤っているからだ。これは我らだけの戦いではない。邪悪な支配者を打倒する民衆の戦いでもあるのだ！」

「……！」

その言葉にハッとフランメ様が目を大きく見開きます。

そう、これがバリストアン王国とヴァンキッシュ帝国の違いです。

貴族が国を統治するバリストアン王国では何よりも気位や様式を尊びます。

それ故に国民を身内同士の争いの矢面に立たせるなど以ての外と思うでしょう。国民も貴族同士の争いには我関せずというのが普通です。

ですがヴァンキッシュ帝国においてその思想はまったくあてはまりません。
なぜなら――

「そしてもう一つ、お前が勘違いしていることがある」

アルフレ임様が民衆に振り向き、大きな声で皆を鼓舞（こぶ）するように拳を振り上げます。

「ヴァンキッシュの民を見くびるな！ 国民がすべて武を修めるこの国に戦えぬ者などいない！ 女も男も子供も竜も！ 我が国の民は等しく戦士である！ そうだろう、皆の者！」

「おおっ！」

先程にも勝る大歓声が民衆から上がりました。その声に呼応して、門の内側にいたヴァンキッシュの方々も拳を振り、歓声をあげます。

「全員でヴァルガヌスのクソ野郎をぶっ飛ばすぞ！」

「アルフレ임様万歳！ ヴァルガヌスはクソ食らえ！」

湧き上がる人々の中心で腕を組み仁王立ちするアルフレ임様の後ろ姿は実に堂々としていて、どこかバーン陛下を彷彿（ほうふ）とさせるものでした。

「かつてヴァンキッシュ帝国の祖だった方々は、自らの心身を鍛えるためにあえて苛烈な環境であるこの場所に国を築いたと聞きました」

強い皇帝の下、誰もが戦士であり、国を脅かす邪悪な存在が現れれば自ら打倒せんと武器を手に取り戦う。何百年も経った今となっても、かつての鋼鉄（こうてつ）のような強い意志と

闘争心は、こうしてこの国に住む人々の魂に刻まれて、連綿^{れんめん}と受け継がれているのでしよう。

それ故にヴァンキッシュ帝国の国民にはフランメ様のような、秩序を重んじて関わりせないようにするやり方よりも、アルフレイム様のような感情に訴えかけて闘争心を煽^{あお}るやり方の方が正解なのでしょうね。

「はは……やはり兄上^{うづわ}こそが皇帝にふさわしい。たとえ間に合わせだったとしても、私に王になれる器^{うづわ}はなかったみたいだ」

歓声の中、消え入りそうな声でフランメ様がそうつぶやきました。その目はアルフレイム様の方を向いていて、まるで太陽を見上げているかのように、まぶしそうに細められています。

フランメ様……きつとこの国でなければ、名君になられる器^{うづわ}を持ったお方だったのでしょうか。

心中お察しいたしますわ。

「——どうやらうまくいったようだな」

声に振り向くと、いつの間にか私の背後に立っていたジュリアス様がしたり顔で頷いておりました。



「ごきげんよう、お寝坊ジュリアス様。遅れてきたくせに、何を訊知り顔をなさっているのですか？」

「随分な物言いだな。こちらは貴女がまだ幸せそうな寝息を立てている朝早くから、帝都に向かう紅天竜騎兵団の騎士達に指示を出していたというのに」

……民衆を扇動して味方につけるこの策。

アル弗雷ム様にしては随分と知恵の回ることをされるとは思っていました。

「……もしや帝都に情報を流布したというのはジュリアス様のお考えですか？」

「そういうことだ。元々はフランメ殿を奪還する際に用いようと思っていた策の一つだったが、殊の外うまくいったな。これほどの予備戦力が戦列に加わるとは嬉しい誤算だ」

髪をかき上げながらサラツと口走るジュリアス様。

もう、本当になんなのですかこのお方は。憎たらしいことこの上ない腹黒さと優秀さに呆れて、先日から抱いていた怒りが消え失せてしまいました。

「予備戦力ということは、主に戦うのは私達ということで良いのですね？」

「当然だ。やる気に満ち溢れているところ申し訳ないが、彼ら民衆の出番は基本的にない。まあ、これだけの国民がヴァルガヌスの悪事を知って反抗しているという威圧が主

な仕事となるであろうよ」

現状向こう側についている兵の方々も、民衆が反抗しているということを知れば戦意を削がれることは間違いないかもしれません。皇宮に残っている少ない戦力を繋ぎとめるのに必死なヴァルガヌス様からしてみれば、相当に嫌らしく効果的な策といえるでしょう。

「それを聞いて安心いたしました。それで、皇宮への突入はいつ頃の予定ですか？」

「聞くまでもない！ 今、この時である！」

私達の会話を割り込むように、にゅつとアル弗雷ム様が顔を出します。

そして私の手を取ると、目を見開いて宣言しました。

「この高まりに高まった戦意の熱をわざわざ冷ます必要などあるだろうか？ いや、ありはしない！ 行くぞ皆の衆！ 勝利の女神を抱きに行く！ 我と狂犬姫の後に続け——」

「脳筋のうきんのくせに何勝手に指示を出そうとしてるんですか」

「おっふう!!」

いつの間にか傍に立っていたジン様が、槍やりの石突でアル弗雷ム様のお腹を突きます。吹っ飛んでうずくまり、悶絶するアル弗雷ム様。

そんな彼に、紅の四騎士の方々が駆け寄ってきます。

「あー。アル様が復活してるー。わーい」

「うおおお！ 隊長の復帰で紅天竜騎兵团完全復活だあああ！」

「然り。それでこそ我らの隊長だ」

アルフレイム様は突かれた横腹を押さえながら痛そうに立ち上がると「おお！」と声をあげて笑顔で言いました。

「お前達、心配をかけたな！ だがもう大丈夫だ！ この通り、私は我が愛しのスカレットの献身的な治療によりピンピンしておるぞ！」

「青い顔して何言ってるんですか。それに心配などしていませんよ。あの程度で死ぬようであれば、紅天竜騎兵团の隊長は務まりませんので」

憎まれ口を言いながらもジン様のお顔には微笑が浮かんでおります。

アルフレイム様がお倒れになった時も皆様本気でショックを受けていらっしやいましたし、雑な扱いに見えてもやはり主君としてしっかり慕っていらっしやるのですね。

「――悪くないかもしれんな」

隣に立っていたジュリアス様が不意にポツリと、そんなことをつぶやきました。

悪くない？ 一体何に対して言ってるのさっしやるのでしょうか。

そんな私の疑問の表情が伝わったのでしょうか。

ジュリアス様はこちらを見ながら言いました。

「このまま皇宮に攻め込むという案だ。これほどまでに民衆の戦意が高揚しているならば、その余勢を駆って出るのも悪くあるまい」

その言葉に近くに立っていたレオお兄様とナナカが嫌そうな顔で「えっ」と濁った声を漏らします。私としてはすぐに鬱憤（うつげん）を晴らせそうで願ったり叶ったりですが――

「そんな行き当たりばったりな作戦で大丈夫なのですか？」

「ここまでくれば他にできることなどたかが知れている。相手に策を弄す時間を与えないという点においても今攻め込むことは理に適っているしな。それに――」

フツと微笑みながら、ジュリアス様は目を細めて私を見つめながら言いました。

「他の男に目移りされても困るからな。そろそろ我が姫のご機嫌を取って置かねばなるまい」

昨日私が言った言葉、そんなに気にしていたのですね。

だからと言って、こんな大勢の方がいる前でそのように意味深に取られることを言うなんて。

この腹黒王子、相変わらずデリカシーが欠けておりますわ。

「言わぬが花という言葉をご存じですか？」

「口に出さねば気づかぬ花が相手では仕方なからう」

ああ言えばこう言う。このお方、本当に私に好かれる気がありなのでしょうか？

「パリスタンの諸君！」

ジト目でジュリアス様を睨んで圧をかけていると、アルフレ임様が四騎士の方々を引き連れてこちらに歩いてきます。

「これより皇宮に討ち入る！　これがおそらく、我が国の内部で起こる最後の戦いとなる。心の準備は良いか？」

腕を組み仁王立ちでそう問いてくるアルフレ임様に、ジュリアス様は涼し気なお顔で頷かれました。

「問題ない。丁度こちらも話がまとまったところだ」

それに対し、ナナカとレオお兄様が困惑した表情でつぶやきます。

「話がまとまった……？」

「何一つ我々は了解を取られていないのですが……？」

二人共、お可哀想に。本来ならジュリアス様に文句の一つや二つも拳と共にぶつけるところですが、時は一刻を争うとのことですからね。

不本意ではありますが、私も涙を吞んで。渋々。

皇宮への殴り込みに参加させていただきたいと思います。

「では同胞達よ！　いざ、皇宮へ出撃——」

「——待ちやがれ」

アルフレ임様が号令をかけようとしたその時でした。

宮の入口の方から、殿方の声が響いてきます。振り返るとそこには、イフリーテ様とヘカーテ様が立っておりました。

「……時間は取らせねえ。行く前に少したけ俺の話を聞いていけ」

ごうかきゅう 業火宮の宮内に戻った私達は、入口すぐの広間で足を止めました。

「話があるとのことだったが、アルフレ임殿と殴り合いをするならこの騒動が終わった後にももらえるか？　あまり時間をかけてはこちらも面倒なことになるのだな」

先頭を歩いていたジュリアス様が振り返り、イフリーテ様に告げます。イフリーテ様はいつもの苛立つた様子はどこへいったのか、落ち着いた表情で口を開きました。

「さっきも言ったが時間は取らせねえ。それに今はやる気はねえよ。ここは黒竜姫の膝元だからな」

イフリーテ様の隣でヘカーテ様がそっぽを向きながらフンと鼻を鳴らします。

お二人がどういった関係なのかは分かりませんが、どうやらイフリーテ様はヘカーテ

様に頭が上がないご様子でした。

元々イフリーテ様は飛竜に対して恩義を感じているようでしたし、その中でも長い時を生きるヘカーテ様には特別な敬意を抱いていてもおかしくはありませんか。

なんにしろ、この場でまた内輪採めを起こされて余計な時間を取られる心配はなさそうです。

「それで、お話とはなんでしょうか」

私の問いにイフリーテ様は少し逡巡^{しゆんじゆん}した後、ゆっくり口を開きました。

「……バーン陛下に手をかけたのは俺だ」

その言葉に場が静まり返ります。

どう反応すればいいか分からない。そんな空気の中、アル弗雷イム様が怒気を漲らせた顔でイフリーテ様に歩み寄ります。

「貴様。今なんと言った？ 父上に手をかけた、だと？」

アル弗雷イム様の背後の空気が、怒りの感情に呼応するかのごとく熱気を放ってゆらゆらと陽炎^{かげろふ}のように揺らめきます。

今にも話所の時のように二人の激しい戦いが始まりそうな緊迫した雰囲気、周囲の皆様が巻き込まれてはたまらないと後ずさります。

そんな中、ヘカーテ様がアル弗雷イム様の前に歩み出て口を開きました。

「落ち着け。話には続きがある」

アル弗雷イム様とヘカーテ様の視線が交錯します。

五秒ほどそうしていたでしょうか。アル弗雷イム様が目を閉じると、纏^{まと}っていた背後の熱気が収まります。本人も一時の感情でカッとしたことを自覚したのでしよう。

未だに強張った表情をしながらも、感情を抑えた低い声で言いました。

「……話を続けよ」

アル弗雷イム様の反応にイフリーテ様は特に感情を激することもなく一瞥^{いちべつ}だけすると、私達に視線を向けて淡々と話し始めました。

「陛下は次期皇帝にアル弗雷イムを選んだことをルクから聞いた。アル弗雷イムとの戦いを禁じられ、強さの証明すらもできずに、皇帝にもなくなつた俺は自分の生きる意味を奪われた気がして……陛下を憎んだ」

アル弗雷イム様への執着は自分の強さを証明したいがためだったのですね。

確かに単純な戦力で言えば、バーン陛下を抜けばアル弗雷イム様はこの国で最強といえるでしょう。変身した状態のイフリーテ様も相当な強さを持っていましたが、それでも本気になったアル弗雷イム様には一歩及ばないと感じましたし。

「二日前の夜。ヴァルガヌスと共謀して皇帝の寝室に侵入した俺は、病で床に伏している陛下の無防備な胸に、剣を突き刺そうとした。だが、できなかった」

イフリーテ様が拳を握り締めてうつむきます。

「生き方を教えてもらった。その強さに憧れた。そもそも俺が皇帝を目指したのも最強の象徴だった陛下を乗り越えて、俺の存在証明をこの世界に刻みつけたからだ。その道を閉ざされたからといって、どうして恩人を殺すことができる？」

震える声で独白する彼の姿からは、確かな葛藤が見て取れました。

「だが剣を納めようとしたその時だった、俺の目の前に、紫色の羽根^レが舞う幻覚が見えた」

——紫色の羽根の幻覚。

その言葉に思わずジュリアス様と顔を見合わせます。

「……ジュリアス様。テレネツツア様は今どうしていらっしゃるのですか？」

「パリスタンの僻地^{へきち}にあたる開拓地で労働刑に処されている。それに今、あれは加護の力を失っているようだな。今回の件に関与しているとはさすがに考え難い」

色こそ違いますが羽根が舞う幻覚という光景は、女神バルミアの使徒^{しと}であったテレネツツアさんが使っていた魅了^{みりょう}の加護と同じものです。

一瞬あの方が逃げ出してまた暗躍^{あんぐく}しているのかと思いましたが、どうもそうではないようですわね。

テレネツツアさんが加護の力を失ったという言葉は引っかりましたが、今はそれよりもイフリーテ様のお話を聞くのが優先です。

「その光景に目を奪われているうちに、背後からヴァルガヌスの声が聞こえてきた。皇帝を殺せと。俺はその声に従うように、短剣を陛下の胸に……」

苦悶^{くもん}の表情を隠すように両手で顔を覆いながら、イフリーテ様がその場に膝をつきました。

「思えば今までも何度もそんなことがあった……俺の意思とは無関係に体が動いて……いや、俺自身の意思が元からそうだったかのように思い込まれていた。そうでないや誰がヴァルガヌスみたいなクソ野郎と手を組むかよ……クソが！」

イフリーテ様が両手でドン！と床を叩きます。その姿を見てヘカーテ様が哀れな者を見るかのような目でイフリーテ様を見下ろしながら口を開きました。

「こやつが言っていることは本当じゃ。寝ている間に調べた結果、身体に何者かの強力な魔力の残滓^{せんし}があった。洗脳^{せんのう}か催眠か、なにかしらの魔術的干渉を日常的に受けていたのである」

もしイフリーテ様の話が本場で、ヴァルガヌス様かその手の者によって魅了^{みりょう}の加護のような力で操られていたとすれば。

テレネットアさんの時のように、他にも誰か身近な方が操られているかもしれない。せん。

これは面倒なことになりましたわね。

「力を解放して竜人化した時、頭ん中に靄^{もや}みてえに纏^{まと}わりついてた魔力が一気に晴れた気がした。その時に、ようやく分かったんだ。何よりもまず真っ先にプチ殺さないといけねえヤツがいるってな」

イフリーテ様は立ち上がると広間の入口の方に歩いていきます。

アルフレ임様は横を通り過ぎようとしていくイフリーテ様に目を細めて言いました。
「……父上の件は不問に処す。だが操られたのも貴様の弱さだ。それを忘れるでないぞ」

「テメエに言われなくても分かってたよそんなことは」

肉と骨が軋む音を立てながら、イフリーテ様の姿が竜人のように変化していきます。

「――俺を一番許せねえのは俺自身だ。ヴァルガヌスは俺が殺す」

そう言って、イフリーテ様は宮から出ていかれました。

陛下が実は暗殺されていて、イフリーテ様が操られていたという衝撃の事実の皆様が騒然とする中。私はふと一つの疑問を口にします。

「イフリーテ様……どうして話してくれたのでしょうか。私達に真相を伝えるメリットなど何もないでしょうに」

「多分、詰所で倒れた後にボク達が助けたから、その借りを返したつもりなんじゃないかなー」

イフリーテ様が去っていった方を見つめながらレックスが答えます。

「アイツ、ああ見えて義理堅いんだよ。飛竜に拾って育ててもらったことにずっと恩義を感じてるくらいだし。態度が悪すぎて気づかれないけどさ」

確かに操られていたことを差し引けば、飛竜への接し方を見ている、口は少々悪いですが見た目ほど悪い方ではないのかもしれない。

アルフレ임様が憎まれているのは……まあ、あのお方のことです。無意識にイフリーテ様のプライドを煽^{あお}るようなことでもしたのでしょう。空気の読めない男です。しね。

「それでどうするのですかジュリアス様。この後は」

顎の先を指先で摘まんで何事かを思案していたジュリアス様は、私の問いにこちらを

振り向いて言いました。

「……どうも腑に落ちん。本当にこの計画の黒幕はヴァルガヌスカ?」

アルフレ임様が眉をひそめて問います。

「それはどういう意味だ?」

ジュリアス様は目を閉じ、自分の中の考えをまとめるようにつぶやきました。

「もし奴かその手の者が魅了の加護のような力を自在に使えるとしたら、もっとうまくやれたはずだ。一国で軍師將軍と呼ばれるほどの狡猾な者が計画したにしてはあまりに――」

その言葉を引き継ぐように、レオお兄様が言いました。

「……違和感がありますか?」

「ああ。杜撰、というのとも少し違うか。フランメ殿、ヴァルガヌスとは本来どのような目的を持った男でしたか?」

名を呼ばれたフランメ様は口元に手を当てて少し思い出すような素振りをした後、口を開きます。

「後継者候補の話が持ち上がる以前の彼は、とにかく徹底的な合理主義者でした。情など不要、国益のためであれば何を犠牲にしても構わない。そんな男です。皇位に就こう

としたのも、自分が皇帝になることがヴァンキッシュにとって一番国益に適うと思った故でしょう」

その答えにジュリアス様は「やはりな」とつぶやきます。

「合理主義の塊だった男ならばなおのこと、今回のように周囲の者すべてを巻き込んで破滅させるような計画を立てる必要などなかったはずだ。そのようなことをして優秀な人材を失えば国力の低下を招き、国益どころか国の崩壊にも繋がりがねんからな」

ジュリアス様が「うむ」と、合点がいったと言わんばかりに頷いて、閉じていた目を薄つすらと開きます。

「これはそう、目的が本来のものとずれていると言った方がいい。ずらされた、とも言える。何か別の目的のために、ヴァルガヌスの行動が変化した、もしくはさせられたのだ。その方がしっくりくる」

「……ヴァルガヌス様ですら、誰か別の黒幕に操られているにすぎない、ということでしょうか」

私の問いにジュリアス様は面倒くさそうに肩をすくめました。

「私の考えすぎであることを祈るがな」

髪をかき上げながらジュリアス様が皆様の顔を見渡します。

自分の発言のせいで、その場の全員の表情が緊張で凝り固まっているのが分かったでしょう。

ジュリアス様は苦笑を浮かべると、行きすぎた緊張を取り除くように、少し碎けた声で言いました。

「……気を緩めるのも困るが、緊張しすぎるのも問題だな。つまり私が言いたいのは、これから乗り込む皇宮でどんなイレギュラーが起ころうとも、決して取り乱さぬようにということだ。全員気を引き締めてかかるように」

ジュリアス様の叱咤に全員が頷きました。

そうではなくては困ります。

「急ぎましょう。早くしないと獲物……ではなく、城の兵士達がすべてイフリーテ様に狩られてしまいますわ」



炎帝殿の玉座の間。

人払いした部屋の奥で玉座の前に一人立つ私——ヴァルガヌス・ワイザードは、本来

なら今この時、この玉座に座して勝利の美酒を味わっているはずだった。

「くそ！」

苛立ちのあまり扇を床に叩きつける。

息子可愛さに皇位を譲ろうとしていた愚かな皇帝も。力馬鹿で下品な皇子も。戦うことしか頭にない卑しい身分の男も。私の策によってすべて手玉にとっていたはずだった！

だというのに——

「なんなのだよあの男は……あんな想定外、どうしろというのだ！」

モノクルをかけた執事姿の謎の男。

確かグラハールとか呼ばれていたか。あの男一人にすべてを台無しにされた。

「千人だぞ!? それもただの兵士ではない! 紅天竜騎兵团とまではいかずとも、皇宮を護衛するために鍛えられた生え抜きの戦士達だ! それを無傷でたった一人で全滅させたなど……私は悪い夢でも見ているのか!」

グラハールに殴られて昏倒させられた私が皇宮で目を覚ましたのは翌朝のことだった。私と共に倒された兵士達はほぼすべてが重軽傷を負い、治療なくしてはまともに戦えない有様だった。治療術士を総動員してなんとか兵士の半数は戦える状態にはできた